「人間力」言説から見るアスリート的社会の様相

芦沢　綾斗（筑波大学）

１．目的

本研究の目的は、アスリートに関わる「人間力」言説の分析を通して私たちの社会のありさまを描き出すことである。

２．研究方法

以下の資料における人間力の語られ方を分析した。

- JOC ホームページに掲載されているコラム「オリンピアンズトーク」
- 長谷部誠（2011）『心を整える。勝利をたぐりよせるための 56 の習慣』
- 長友佑都（2011）『日本男児』
- スポーツと人間力が同じ文脈で語られている朝日新聞・読売新聞の記事

３．結果と考察

１）　オリンピアンズトークでは、意識の持ち方、精神面、メンタル、人間性といった視点を軸に競技人生が回顧されている。これらがオリンピックという大舞台で勝つための必要条件として認識されているということがわかる。また、これらの能力を身につけることこそがスポーツの目的と語られることもある。

２）　アスリートの書籍は、主に競技に関わる場面で著者がどう考えどう行動したかという経験談が記されており、著者の人物像や人生をそこから見て取ることの出来る自伝的性格の強いものであるにも関わらず、自己啓発本として消費されることがわかった。

３）　新聞記事は、どの記事にも「アスリートは人間力を身につけているものだ/身につけるべきだ」という認識が前提としてあり、その上で人間力は競技力向上の手段、またはスポーツの目的という２つの立場に大別されたが、どちらにも解釈しうる曖昧な使われ方も多かった。スポーツ界の不祥事について人間力を用いて語る記事は、アスリートへの期待の裏返しであると考えられる。

４．結論

アスリートに「人間力」を求め、「人間形成」「人間教育」を試みることは、憧れの対象であり遠い存在であるアスリートを、「人間化」する行為である。しかし同時に、「人々のアスリート化」とも言うべき現象が起きている。つまり、人々がアスリートに対して人間力を求め、その期待に応えるアスリートを見て、人々はアスリートからそれぞれの教訓を引き出し、自らを鼓舞するという一連の営みが、まるで禁欲的に自らのパフォーマンスの最大化を図るアスリートのようであるということである。この背景には、伝統や学歴が個人の社会的位置づけを担保せず、人生の成功・失敗の責任がすべて個人（の能力）に帰せられてしまう現代社会の性質がある。そんな時代に適応し生き抜くために、人々はよりよい自己を求め、「新しい能力」の獲得・向上に努める。その際にロールモデルとなりうるのがアスリートである。このようなアスリート的社会は、アスリート以前に一人の人間である彼らのあり方を、型にはめてしまっている。そして、よりよい自分であるよう誰もが努力を求められ、物事の結果は努力の主体である個人にその責任が帰せられる自己責任の論理は、その趨勢に適応出来る人と出来ない人との格差や、ともすれば優生思想へと発展していく可能性がある。

５．主な参考文献

１）本田由紀（2005）多元化する「能力」と日本社会―ハイパー・メリトクラシー化の中で―，NTT 出版

２）牧野智和（2014）「人間力」の語られ方:雑誌特集記事を素材として，日本労働研究雑誌，56（9），44-53